

# 住民参画によるまちの将来像が 復興まちづくりに与える影響 - 大槌町吉里吉里地区に着目して -

吉平 美月<sup>1</sup>・二井 昭佳<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 非会員 国土館大学大学院 工学研究科 建設工学専攻 (〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1)

E-mail: s4me203p@kokushikan.ac.jp (Corresponding Author)

<sup>2</sup> 正会員 国土館大学教授 理工学部まちづくり学系 (〒154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1)

E-mail: nii@kokushikan.ac.jp

本稿では、復興まちづくりの有効な手法の構築を目指し、東日本大震災で被災した岩手県大槌町吉里吉里地区を対象に、吉里吉里地区の復興の経緯を把握したうえで、行政担当者へのヒアリングと、住民アンケートから、住民参画によるまちの将来像の作成と共有が復興計画の推進や住民理解に与えた影響を考察した。その結果、住民参画によるまちの将来像が与えた影響として、復興まちづくり事業における3つの影響、住民との関係構築における3つの影響、住民の復興の実感に与えた2つの影響を明らかにした。住民アンケートをもとに、住民参画によるまちの将来像における今後の改善点を指摘した。

キーワード：復興まちづくり、住民参画、デザインノート、バックキャストイング

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と目的

近年、災害が激甚化しており、復興まちづくりの重要性が高まっている。被害が広範囲にわたる場合には、復興後のまちの姿がイメージしにくいいため、復興計画が進められていても、住民の不安やいらだちが生じやすい。また行政担当者にとっても、膨大な作業が存在するために、ややもすれば眼前の作業と復興後のまちの姿の関係が掴みにくくなることが起こる。加えて、復興まちづくりの対象範囲には、国や都道府県といった異なる管理者の施設が含まれている。こうした困難な状況を改善する復興まちづくりの手法が求められている。

そのひとつとして、計画の初期段階において、復興後のまちの姿を住民と共に作成し、そのゴールに向かって作業を進めていくバックキャストイング方式が挙げられる。ゴールを明確にすることで実現に向けたプロセスがわかりやすくなることや、区画整理などの合意形成がスムーズになること、復興後のくらしのイメージによる安心感を得られることなど、復興に貢献することができるからである。

住民参画によるまちの将来像を災害復興において用いた事例に、東日本大震災で甚大な津波被害を受けた岩手県大槌町の復興まちづくりが挙げられる。大槌町では、住民主体のボトムアップによる復興計画の立案に取り組んでおり、その過程で地区の骨格イメージをまとめたコンセプト図(2012年)と地区全体の空間イメージをまとめたデザインノート(2014年)を作成し、それにもとづいて計画・設計・施工が行われている。

しかし、実際にコンセプト図やデザインノートが果たした役割と効果については検証されていない。本研究では、大槌町の復興まちづくりのなかでも国道移設や防潮堤のセットバックなどにも取り組んだ吉里吉里地区に注目する。住民参画によるまちの将来像共有に関する既往研究には、福島らの復興まちづくりのプロセスから見る吉里吉里地区のコミュニティに着目した研究<sup>1)</sup>や福島らのデザインノートと共創的都市デザイン戦略の研究<sup>2)</sup>などがある。また復興計画の検証としては、例えば松本らによる協議会と専門家の視点から復興プロセスを検証する研究<sup>3)</sup>があり、いずれも興味深い。

ただ復興まちづくりにおける住民参画によるまちの将来像の効果を検証するには、当時の行政担当者と住民の

影響を明らかにすることが重要だと考える。

そこで本研究では、岩手県大槌町吉里吉里地区の復興まちづくりに活用されたコンセプト図とデザインノートに着目し、①吉里吉里地区の復興の経緯を把握したうえで、②行政の関係者へのヒアリング調査により、コンセプト図とデザインノートが計画・設計の実現に与えた影響と、③吉里吉里地区の住民へのアンケートにより、デザインノートが復興の実感に与えた影響を明らかにすることを目的とする。

## (2) 研究の対象と方法

研究の対象は、岩手県大槌町吉里吉里地区を対象とする。その理由は、大槌町は復興まちづくりの初期段階から住民主体の復興計画を進めており、コンセプト図とデザインノートという住民参画によるまちの将来像を作成し、復興事業を進めたことによる。なお、当地区は2022年に土木学会デザイン賞優秀賞を受賞している。

研究方法は、まず2章で吉里吉里地区の概要と復興事業のプロセスを整理する。次に3章では、コンセプト図とデザインノートが計画・設計の実現に与えた影響について行政関係者へのヒアリング調査をおこなう。また4章ではデザインノートが復興の実感に与えた影響について地区住民へのアンケート調査をおこなう。それらの結果を踏まえ、5章では吉里吉里地区におけるコンセプト図とデザインノートが復興まちづくりに与えた効果と、今後の改善点について考察する。

## 2. 大槌町吉里吉里地区の概要

### (1) 吉里吉里地区の概要と過去の津波災害

大槌町吉里吉里地区は岩手県の船越湾に面する地区である。もとは吉里吉里村であり、1889年(明治22年)に大槌村、小槌村と合併し大槌町となった。当地区は網元で盛岡藩の御用商人をつとめた吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛の本拠地であり、白い砂浜が魅力的な漁村集落である。また住民同士のコミュニティが強固な地区でもあり、例年秋に開催されている地域の運動会は2023年で第50回を迎えた。この吉里吉里地区の強固なコミュニティは東日本大震災復興時にも大いに発揮された。

吉里吉里地区は過去に何度も津波被害に見舞われている。明治以降では1896(明治29)年の明治三陸津波、1933(昭和8)年の昭和三陸津波、2011年3月11日の東日本大震災が挙げられる。吉里吉里地区の人口の3.8%にあたる95名(2019年6月時点)が亡くなり、被災した建物は467棟(2011年9月時点)に及んだ。

### (2) 復興まちづくりのプロセス

### a) コンセプト図の作成の経緯

吉里吉里地区では2011年5月には自主的な復興検討会議を開催し、同年10月から11月にかけて住民を主体とする地域復興協議会を4回開催し復興計画の基本方針や構想を議論した。

同年12月には地域復興協議会で検討されてきた内容をまとめた「大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画」が策定され、これにより復興計画の方針が確定された。ただ、復興計画を進めるためには具体的な計画が必要であり、2012年2月にコーディネーター陣は地域復興協議会の議論を踏まえ地区の骨格イメージをまとめたコンセプト図(図-1)を作成した。コンセプト図は復興計画を推進するうえで課題となる、国道の移設、防潮堤のセットバック、地区内の空間構成に踏み込んだ理想的な計画案である。

その後、2012年6月には大槌町都市整備課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所による国道45号の移設に関する協議が行われた。さらに同年11月には岩手県と防潮堤に関する協議が行われるも、この時点では防潮堤のセットバックの提案は受け入れられなかった。

### b) 大槌デザインノートの作成

2013年3月からは公共空間や公共施設を中心に暮らしや空間の使い方を含めて議論する大槌デザイン会議が開



図-1 吉里吉里地区コンセプト図(2012年)



図-2 大槌デザインノート

始された。大槌デザイン会議とは復興事業により整備する公共施設、公共空間のより具体的な計画・設計、各地区内外の検討内容の調整を行うために設置された全体会議である。その成果として取りまとめられたのが、大槌デザインノートである(図-2)。

吉里吉里地区では2013年から2014年にかけて、地区別ワーキングメンバーと地区役員会、地区の若手らを加えたメンバーで構成された復興計画ワークショップ(以下、WS)が開催された。

デザインノートの作成と同時進行で岩手県から防潮堤についての協議が再開し、2013年6月にはコンセプト図に近い形で防潮堤をセットバックすることが決まった。

WSでは、公共空間や公共施設の配置位置や使い方、大切にすべきことについての意見交換や、空間イメージを平面図やスケッチで提示しての意見交換を行った。また協議の内容を協議に参加していない人にも理解してもらうために、かわら版を複数回、全戸配布した。

2014年3月に大槌デザインノートが完成し、大槌町に提出された。大槌デザインノートの吉里吉里地区に関するページは全7ページで、まちの広場やまちの骨格など復興まちづくりの方針を具体的なスケッチや模型写真として明示し、それぞれのイメージの根拠となる住民の意見も明記されている。

### c) 大槌デザインノート完成後

デザインノートの具現化に向け、避難計画の策定や公民館のデザインなどに関して検討が進められた。

その後2015年10月に国道45号が新ルートで開通、2018年4月には公民館が完成、2021年3月には防潮堤竣工と復興事業が進められた。表-1は吉里吉里地区復興のプロセスを簡単に示したものである。

## 3. 復興計画の推進や計画の実現に与えた影響

### (1) ヒアリングの対象者

住民参画によるまちの将来像が計画・設計の実現に与えた影響を把握するために、吉里吉里地区の復興業務に携わった行政の関係者にヒアリングを実施した(表-2)。

山本氏は音更町(北海道)からの応援職員で、大槌町都市整備課都市計画班2012年度後期班長を務めており、区画整理の範囲や防集団地の位置、また国道移設など復興計画の初動期に尽力された方である。松山氏は所沢市役所(埼玉県)からの応援職員で、都市整備課都市計画班2013年度班長を務めており、区画整理の換地や防集団地の実施、また防潮堤のセットバックなど復興計画の中盤に尽力された方である。越田氏と平野氏は町の出身で、復興計画の初動期から継続して復興に尽力された方である。西元氏は奄美市役所を退職し岩手県庁に勤務しており、2013年の岩手県釜石復興局漁港課で防潮堤のセットバックの再協議のきっかけとなった人物である。

対象者全員に復興計画全体に関する質問を行った上で、山本氏には国道の移設、松山氏には区画整理の換地計画及び防潮堤のセットバック、西元氏には防潮堤のセットバックについて伺った。平野氏と越田氏には復興まちづくり全般について伺った。

### (2) コンセプト図とデザインノートに対する印象

山本氏と松山氏には共通の質問で最初に、コンセプト図を見たときの印象について聞いた。いずれも好印象ではあったが、コンセプト図にある通りのまちなみにするにはどうすればいいのか、本当にコンセプト図のようなまちなみにできるのかという懐疑的な気持ちもあった。そのためそこに至るまで必死に頑張ろうという気持ちにもなったとのことだった。

表-1 復興のプロセス

年月	取り組み	空間計画の段階	
2011年	3月11日	東日本大震災発生	復興計画の方針と居住範囲の決定
	10月	被災10地区、地区住民による地域復興協議会地区ごとにコーディネーターを配置	
	11月	各地区の復興まちづくりの基本的な考え方と地域復興協議会の計画案を決定	
	12月	『大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画』策定	
2012年	2月	コーディネーター陣が各地区のコンセプト図を作成	地区の骨格の決定
	4月	地区別WG開始	
	6月	三陸国道事務所と国道45号の移設に関する合意	
	9月	復興土地区画整理事業の都市計画決定、防災集団移転促進団地の認定	
12月	県と防潮堤に関する協議		
2013年	3月	大槌デザイン会議開始	復興まちづくりの空間イメージの決定
	4月	県との防潮堤計画再協議	
	6月～	防潮堤の線形、構造形式の決定	
2014年	3月	大槌デザイン会議終了、デザインノート完成	公共空間、公共施設の具体的な設計、施工
	7月	公共空間、公共施設の具体的な検討、避難計画の策定、コミュニティ戦略の立案	
2015年	7月～	公民館基本設計開始、ワークショップ	
2018年	4月	公民館落成式、まちびらき	
2021年	3月	防潮堤竣工	

表-2 ヒアリング対象者と質問内容

対象者	当時の役職	ヒアリング日付
山本智久氏	大槌町都市整備課都市計画班2012年度後期班長	2023年12月7日
松山幹明氏	大槌町都市整備課都市計画班2013年度班長	2023年11月28日
越田宣弘氏	大槌町都市整備課都市計画班2017-2019年度班長	2023年10月2日
平野正見氏	大槌町都市整備課	
西元昭一郎氏	岩手県釜石復興局漁港課2013年度	2023年12月25日

また西元氏は「私は奄美大島の出身なのですが(中略)吉里吉里の海を基軸としたまちづくりは奄美、沖縄のまちづくりの理念と類似しており、日本の北と南で、こういう理念が一致することがあるのかと、まず大変驚いた(西元氏)」との回答もあった。

### (3) 復興まちづくり事業における影響

ヒアリングの結果、コンセプト図とデザインノートを作成することにより3つの影響があったことが分かった。1つ目が計画・設計の推進に与えた影響、2つ目が土地の売買に関する影響、3つ目が外部機関との交渉に関する影響である。

#### a) 計画・設計の推進に与えた影響

「コンセプト図という将来像は、図として描くのは簡単だけど、どうやって用地を確保するか、計画を進めるか。行政からしたら将来像を出すのが早すぎるのではという思いはあった。だからこそそれに向かって行政は必死になって努力した(山本氏)」, 「コンセプト図は、地域の皆さんのの共通のイメージとして根付いていたと感じていた(西元氏)」などの回答を得た。

西元氏は、前述したように、初見でコンセプト図の理念に共感し、それが防潮堤を再検討すべきだと考えたきっかけになったとのことだった。

このことから住民参画によるまちの将来像を作成したことで、行政担当者は実現の難しさを感じつつも、計画推進のモチベーションが生まれ具体的な作業イメージを持つことができたこと、将来像に共感した関係者を動かし、将来像の実現可能性を高まる役割を果たしたといえる。

#### b) 区画整理に関する影響

区画整理のエリアの設定については、地域復興協議会の議論をもとに描いたコンセプト図は、地域の意見を反映したものであるため、「総論で賛成を取ってから個々の説明に移る体制を作ったことにより案の白紙化・手戻りがほとんど起こらなかった(山本氏)」とのことだった。

その後の換地計画の協議でも、「区画整理の地権者にはまずデザインノートを説明してから換地の相談という順番にすることで、理解が得やすかった(松山氏・越田氏)」との回答を得た。

このように協議会やワークショップを通じて住民がまちの将来像の作成に参加することで、地区としての将来像だという意識が芽生え、地権者が住民参画によるまちの将来像に合わせるという流れが生まれたと考えられる。

#### c) 外部の関係機関との交渉に関する影響

吉里吉里では、国道45号の移設と、防潮堤のセットバックに取り組んでおり、それぞれ管理者である国と県との交渉が必要であった。

国道の移設については、「国土交通省東北地方整備局

三陸国道事務所との協議の資料として活用し、これが移設に向けた協議を行うきっかけになった(山本氏)」との回答を得た。ただ、コンセプト図を提示することで全てがスムーズにいったわけではなく、「災害復旧とは異なるため、毎月何度か図面や検討資料を用意し、住民説明会の状況も説明しながら、実現に向けた協議をおこなった(山本氏)」とのことであった。

また防潮堤については、県の西元氏がコンセプト図を見て計画に共感したことで、西元氏が防潮堤のセットバックに向けて尽力された。ヒアリングでは「協議外の場で関係機関にコンセプト図を見せたことがあり、地域の熱意や復興への想いを伝える役割を果たしていた(西元氏)」とのことであった。

これらのことから、外部機関との交渉においても、住民参画によるまちの将来像が、協議を開始するきっかけとしての効果を発揮したといえる。また、県の西元氏が国や県の関係者にコンセプト図を見せたように、地域の想いを伝えるツールとしても機能したと考えられる。

### (3) 住民との信頼関係における影響

ヒアリングの結果、住民参画によるまちの将来像の作成する過程で、住民との信頼関係にも3つの影響があったことが分かった。1つ目はローカルな知識を得られたことに関する影響、2つ目は住民の気持ちに関する影響、3つ目は住民との信頼関係に関する影響である。

#### a) ローカルな知識を得られたことに関する影響

復興には多くの応援職員が携わっている。しかしこの土地に来たばかりの応援職員は地名や方言がわからないことも多い。そのため住民参加でまちづくりをすることで現地の重要な情報を教えてもらうことができた。「防災集団移転の団地に関しては昔墓地があった可能性が高いので避けた方がよいなどの意見が住民から実際に出た(山本氏)」という回答を得た。このことから手戻りの少ない検討ができていたと考えられる。

#### b) 住民の気持ちに関する影響

「デザインノートを見せたことで地元の人たちは多分夢が持てたと思う。何年かしたらこういう素敵なまちなみができる、だから今は我慢しようっていう思いになってくれたと思う(山本氏)」という回答を得た。またその効果が波及したのか、「大槌町の砂浜の再生を願う集まりで、住民や建設コンサルタントの方々が防潮堤のセットバックと砂浜の再生に関して熱く語る姿が印象に残った(西元氏)」という回答も得ている。

このことから、住民の気持ちに寄り添って計画を進めていることを実感できる効果があったと考えられる。

#### c) 住民との信頼関係に関する影響

最後が住民参画によるまちの将来像の作成する過程で説明会やワークショップなど、様々な場面で住民と多く

接することによる効果である。「復興区画整理事業に着手して最初の3-4カ月は住民から早くとの声が多く怒られることも多かったが、半年も過ぎるとありがたいと感謝されるようになり心が通い合った(松山氏)」との回答を得た。さらに「用地も最初はなかなか買えなかったが、心が通い合ったところからどんどん買えるようになった(松山氏)」との回答も得た。このことから作成過程で住民と良好な信頼関係を構築できたと考えられる。

「説明会の資料作りや念入りな説明体制により時間と手間がかかったが、住民参加で計画を進めていくことで得られた信頼関係もあり、それが間接的に事業の進捗につながっている部分もあった(松山氏)」という回答に現れているように、住民参画は担当者の負担が増えるものの、それに見合う利点があることが確認できた。

#### 4. 住民の復興の実感に与えた影響

##### (1) 調査実施概要

デザインノートが復興の実感に与えた影響を調査するために、区画整理内・防集団地の180世帯を対象に、1世帯に2枚アンケート用紙をポスティングにて配布し、67枚回収できた。質問項目は回答者の属性に加えて、大きく、復興協議会の過程とコンセプト図の認知度、デザインノート作成過程とデザインノートの認知度、現在の吉里吉里地区のまちの姿についての4項目である。

##### (2) 協議会などへの参加率と計画の理解度

アンケート結果をまとめたものが図-3である。

コンセプト図のベースとなった復興協議会の参加状況は16人(24%)となった。さらにデザインノートを作成したWSは復興協議会とは異なり、地区役員や若手のみが協議に参加スタイルだったため、参加率は12人(17%)と低い結果となった。またどちらの協議の場も男性の参加が多く、参加している人数の男女比に偏りがあったことがわかった。

WSに参加できなかった住民向けにかわら版を配布していたが、かわら版を知っていた人は67人中40人(60%)であった。検討会に参加していないがかわら版は知っているという回答した人の9割が、検討内容を理解できたと回答しており、参加できなかった方への情報提供の重要性がみてとれた。

##### (3) 復興後のまちの姿に関する影響

###### a) デザインノートによるイメージ想起への影響

アンケートの「デザインノートを見て復興後のまちの姿をイメージできたか」に対しては、約6割(25/40人)がデザインノートから復興後のまちの姿をイメージでき

たという回答を得た。また、「デザインノートを見て公民館と広場の様子を具体的にイメージできたか」という設問に対しても同じく約6割(25/40人)がデザインノートから公民館と広場の様子をイメージできたと回答し、さらに、「デザインノートを見て生活路と避難路が同じであることをイメージできたか」という設問も同様の結果となった。

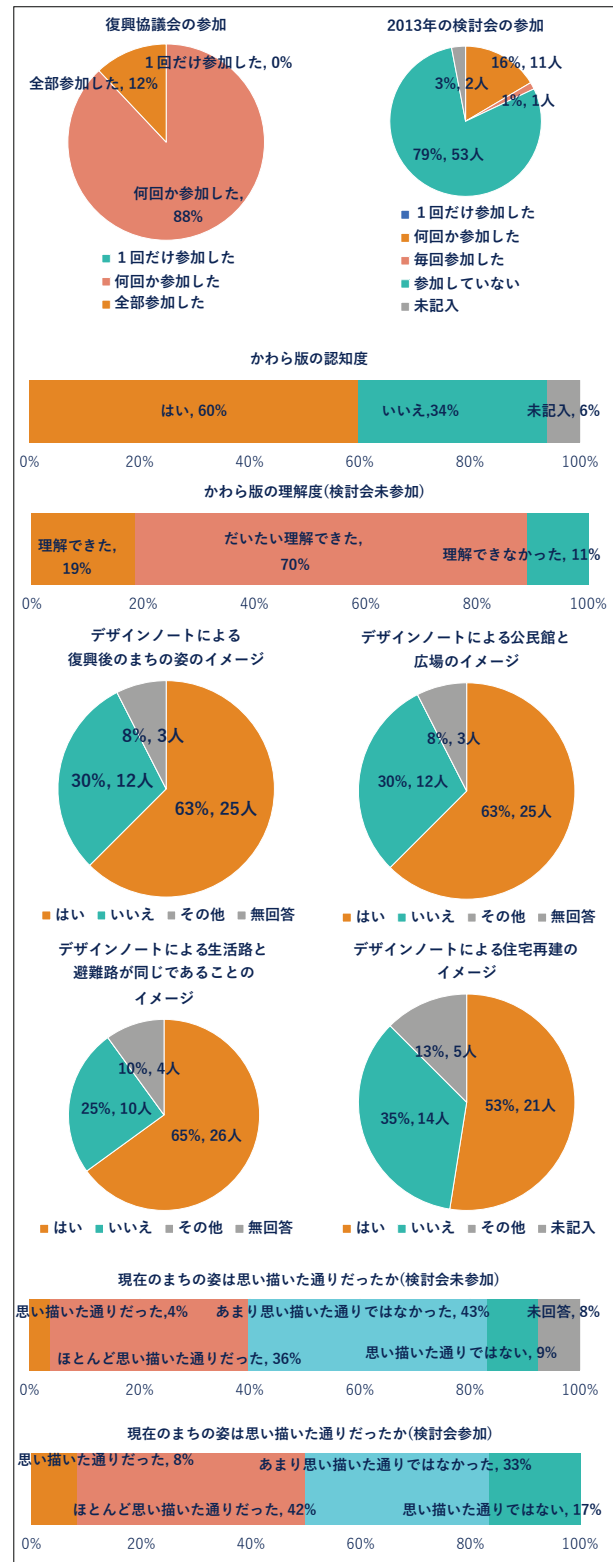


図-3 アンケート結果

また「デザインノートを見て住宅再建のイメージができたか」という設問には、約5割(21/40人)がデザインノートから住宅再建をイメージできたという回答を得た。先ほどの3問と比べて住宅再建はイメージできた人が少し減少した。またアンケートの自由記述欄には「家を建てる時も思ったが平面図だけではすべてを想像するのは難しいと思った」との回答があった。また国道の新しい平面線形や高さを現地で実感して理解することが難しかったという回答や、「国道の高さが、三丁目の盛土の高さここまで来るんだよっていうことを説明できなかった」との回答もあった。デザインノートには屋根伏せにするなど工夫された平面図を多く扱っていたが、高さを読み取ってもらい実感してもらうためには、模型のような立体的な資料が不足していたと考えられる。

#### b) 協議への参加による現在のまちの満足感への影響

WSに参加した人の中で現在のまちの姿が思い描いた通りだったかという問いに対しては肯定的な回答が約5割(6/12人)と半分を占める結果となった。

しかしWSに参加していない人に絞って現在のまちの姿が思い通りだったか集計をしてみると、結果は少し異なり、肯定的な回答が40%と半分(21/53人)を下回った。その理由の多くが空き地が多いということであったが、デザインノート作成のWSに参加した人と参加していない人で、復興後のまちの姿にイメージの乖離があることが分かった。

### 5. 住民参画によるまちの将来像の効果と改善点

#### (1) コンセプト図やデザインノートによる効果

大槌町吉里吉里地区の復興まちづくりに関して復興まちづくり事業への影響と住民への効果でそれぞれ整理する。

##### a) まちづくり事業への効果

まちづくり事業に関する影響として4点があげられる。

1. 住民参画によるまちの将来像で将来の見通しや理念を周知することで、行政はその実現に向けて逆算して行動を起こすことができたこと。
2. 区画整理の範囲や換地計画については、住民参画によるまちの将来像を各地権者に提示することで、スムーズに計画を進めていくことができたこと。
3. 関係機関の交渉において協議資料として使われ、協議のきっかけをつくり関係機関に住民の声として伝えるという役割を果たしたこと。
4. デザインノートの作成が住民の復興まちづくりの計画の理解に役立ったこと。

##### b) 復興の実感への効果

次に住民への影響として以下の2点が挙げられる。

1. 住民参画によるまちの将来像の作成により、将来

の見通しがたち住民が希望を持てたこと。

2. 住民参画によるまちの将来像の作成過程で住民と行政の間に信頼関係が生まれたこと。

#### (2) 今後の復興まちづくりにむけたビジョンの改善点

今後にむけた改善点として以下の3点が挙げられる。

1. アンケート結果から協議会への参加率が低いことや参加者の男女比に偏りがあることが分かった。被災者でも参加しやすい開催方法や、かわら版などの情報提供をおこなうことで復興後のまちの姿や住宅再建など、よりイメージを想起しやすくなると考えられる。
2. アンケート結果より平面図など二次元のイメージだけでは住宅再建のイメージがしにくいことがわかった。二次元のイメージと並行して、模型など三次元のイメージも活用することで住宅再建をよりイメージしやすくなると考えられる。
3. 住民アンケートより、現在のまちの姿に関して空き地が多いとの回答が多く寄せられた。まちの将来像を実現するためにも、住民の再建意向に関する情報開示を継続的に行うことで、再建後の空き地を減らすことができると考えられる。

### 6. 結論

本研究の成果は以下の通りである。

1. 行政の関係者へのヒアリング調査により、コンセプト図とデザインノートが復興まちづくり事業に与えた影響として、計画・設計の推進に与えた影響、区画整理に関する影響、関係機関との交渉に関する影響があったことを明らかにした。
2. 行政の関係者へのヒアリング調査により、コンセプト図とデザインノートが住民との関係構築に与えた影響としてローカルな知識を得られた影響、住民の気持ちに関する影響、住民の信頼関係に関する影響を明らかにした。
3. 吉里吉里地区の住民へのアンケートにより、デザインノートが住民の復興の実感に与えた影響として、復興まちづくり事業への参加率と認知度と住民への影響を明らかにした。
4. 今後の復興まちづくりに向けた住民参画によるまちの将来像の改善点を指摘した。

**謝辞：** なお本研究は、JSPS 科研費 20H04469 の助成を受けて実施したものである。またヒアリングにご協力いただいた山本智久氏、松山幹明氏、越田宣弘氏、平野正晃氏、西元昭一郎氏、アンケートにご協力いただいた吉里吉里地区の皆様、配布にご協力いただいた藤本俊明氏、芳賀博典氏に感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 福島秀哉, 二井昭佳, 岡村健太郎, 五三裕太: 復興におけるコミュニティ単位の構造に関する研究, 地域安全学会論文集 No.39, pp175-185, 2021
- 2) 福島秀哉: デザインノートと共創的都市デザイン戦略, 景観・デザイン研究講演集, No.19/pp.55-58, 2023
- 3) 松本暢子, 加藤仁美, 小川美由紀: 東日本大震災における復興まちづくりのプロセスに関する考察福島県いわき市豊間地区のふるさと復興協議会の活動とその支援, 都市計画論文集, Vol.48/pp.699-704, 2013
- 4) 福島秀哉, 二井昭佳, 岡村健太郎, 五三裕太: コミュニティの形と復興区画整理大槌町町方・吉里吉里の地域デザイン, pp.198-248, 鹿島出版社, 2023